

K-027

## 少人数クラスの運営に汎用型ソーシャルネットワークを活用した教育事例の研究 A case study on education using a generalized SNS for the management of a small class

田島博之十  
Hiroyuki Tajima

### 1. 研究背景

現在の高度情報化社会では個人情報の漏洩や、出会い系サイトに学生が巻き込まれる事件、また、オンラインゲームによるネット依存症等、様々な問題が生じている。特に SNS の問題は教育現場においても重要な問題であり、文部科学省でも新たな指導要領に情報能力向上の為の指針を示すとともに、本年 3 月にも教員に対して学生の情報活用能力向上のためのパンフレットを発表している。[1]

情報リテラシー教育は重要であるが、とすると「危険＝使わせない」となりがちな教育の現場。発表者は教員と学生が共に SNS を使っていく中で適切な教育への活用方法を生み出すことに大きな意義があると考えられる。

発表者は勤務校で 27 人の少人数クラスの指導を担当しているが、小・中・高のように綿密な学生指導を行うことは非常に難しい。大学では教員、学生共に制約が多く講義以外に学生と接触することが絶対的に少ないのである。

そこで本研究では学生の利用率が最も高い汎用型コミュニケーションツール“LINE”の対話機能やグループ機能をクラス教育に活用することで教育力の向上を目指している。これらの結果として定性的にはあるが複数の教育効果と利用上の問題点を抽出することができた。

### 2. 学生の SNS 利用状況調査

本学学生の SNS 利用状況を知るための調査を行った。

(1) 調査対象 経営系 3 学部 2 年～4 年 (183 人)

(2) アプリケーション利用状況

LINE, Face Book, Twitter, Others から利用しているアプリケーションを選択。

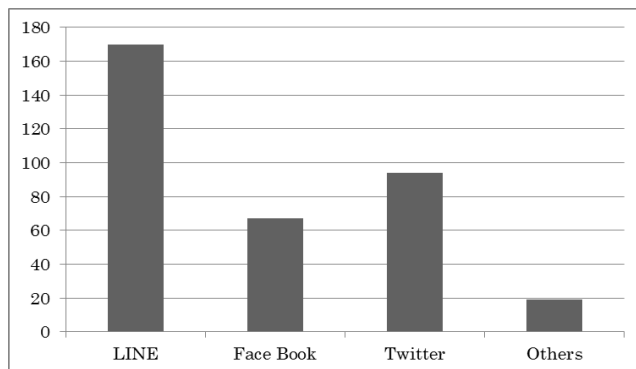


図 1. アプリケーション別 SNS 利用状況

(3) 利用優先順位 (ツール別)

コミュニケーションツールとして 5 つの選択肢から学生が良く利用するツールに順位付けをもらった。

line-m: LINE (メッセージ) / line-p: LINE (通話)  
cell-p: 携帯 (通話) / cell-m: 携帯 (メール)  
pc-m : パソコン (メール)

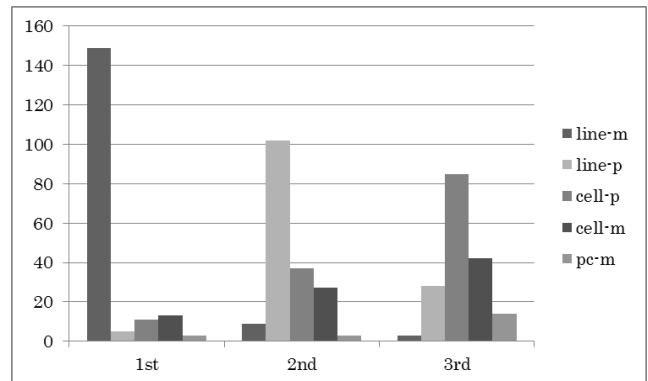


図 2. 利用優先順位 (ツール別)

(4) LINE 利用状況

LINE 利用率: 92.9% (170/183)

登録人数: リンクしているアカウントの数

既読 S: 過去に既読スルーをしたことがある学生の数

未読 S: 過去に未読スルーをしたことがある学生の数

ブロック数: 現在ブロックをしているアカウントの数

グループ: 現在所属しているグループの数

教員 G: 大学教員が一緒に所属しているグループの数

表 1. LINE 利用状況

	登録人数	既読S	未読S	ブロック数	グループ	教員G
平均値	93.9 人	1.4 人	1.4 人	6.3 人	10.6 人	0.4 人
中央値	70.0 人	1.0 人	1.0 人	0.0 人	7.0 人	0.0 人

### 3. LINE の活用法

#### 3. 1 教員学生間の活用

これまで教員から学生への連絡手段は携帯電話や email が中心であったが、これらは LINE と比較したとき伝達の時間が非常に長くなる。つまり、教員から学生に情報を発信し、その返事が学生から帰ってくるまでの時間は LINE の方が格段に速いのである。情報発信からレスポンスがくるまでの時間が短い理由として LINE が情報 Push 型のコミュニケーションであること。また、スマホを利用する学生にとって LINE というアプリを利用する頻度が高く、情報を入力する時間が短時間で済むことがあげられる。さらに学生が情報を読んだときに示される既読機能は、情報を発信する教員側にとって非常に有効な機能となる。

#### 3. 2 グループの活用

LINE には複数のユーザーが同時に参加できるグループ機能がある。グループ機能では個人で幾つものグループが作成でき、所属するメンバー間で情報の共有が可能となる。

† (学) 秀明大学 英語情報マネジメント学部  
秀明 IT 教育センター  
tajima@mailg.shumei-u.ac.jp

例えば、学生から出た質問を教員が個別に対応するのではなくグループ上で対応することで同じ情報を発信するという無駄がなくせる。また、既読情報については個人として特定はできないが、○人中△人が既読という形で情報伝達状況を理解することができる。また、文字や通話での対話機能とは別にノート機能とアルバム機能がある。LINEにおける文字会話はログを消してしまったユーザーには再度見ることができないが、重要な事項についてはノート機能を使うことでテキストに記録することができる。さらに、アルバム機能では画像を共有情報として残すことができる。

#### 4. クラスでの活用事例

発表者の担当するクラス学生は週1回の総合教養演習という講義で顔を合わせる。講義内容としては学生の人間形成を目的としてグループディスカッション、ディベート、創造技法、読書教育などから構成されている。また、これらの講義とは別にスポーツディや大学祭といった大学行事に積極的に参加させることは担任としての重要な業務である。さらにオフィスアワーを設定し大学からの連絡や学生の生活や進路などの個別相談をする。多岐にわたる業務を限られた時間の中で円滑に遂行していくためには学生との連絡手段が非常に重要な鍵となる。以下はLINEを教育活動に活用した事例である。

##### (1) グループを使った反転授業の実践

次の講義のテーマを告知したり関連動画のURLを与えたりすることでスマホやタブレットを用いた予習を行わせた。これにより講義におけるディスカッションの質を上げることができた。

##### (2) 講義に対するモチベーションの向上

LINEを使って幾つかの選択肢の中から議論のテーマを学生達に決めさせることを試みた。議論の結果を学生同士で評価させ、その情報をノート機能に掲載することで学生の発言に対するモチベーションを向上させた。

##### (3) グループウェアとしての活用

大学行事でのプロジェクトマネジメントツールとして企画毎、スタッフ毎にグループを作成。これを活用することで対面による会議を最小化し学生、教員の負担を減らした。

##### (4) オフィスアワーの予約

予約表をLINEノートに掲載し最新情報を更新することで学生面談の時間調整が容易になった。

##### (5) 学生からの情報提供

学生間の人間関係や、学生や教員の行動に関する情報が学生から数多く伝えられるようになった。

##### (6) 問題の早期解決

喧嘩のような何気ない発言から学生の悩み事を発見し、対面指導へ繋げることで問題の早期解決を可能にした。

##### (7) 欠席時の事前連絡

担任の講義の欠席時には事前に連絡を入れるルールを決めた。これによりクラス学生全体の出席率が向上した。また、インフルエンザ等の感染性の病気が流行しているときの学生への対応が迅速にとれるようになった。

#### 5. 教育利用上の問題点

以上に述べたようにLINEを有効に活用することで様々な効果が得られることが分かった。しかしながら、幾つかの問題点も見えてきた。

##### (1) 文字を媒体とする問題

LINEは最小化された文字媒体による伝達速度に重要な意義がある。容易に情報を送れる反面、文字を間違えたり送る相手を間違えたりする可能性もある。文章力の弱い学生の場合、人間関係にも影響する。LINEは議論の道具ではなく対面教育のきっかけとして使うことが有効と考える。ネットにおける人間の結びつきは弱い。誤ったLINEの使い方により学生の誤解や不信感を招き、結果として学生との距離が遠ざかるようでは本末転倒であろう。

##### (2) 知的財産権に関する問題

現在の教育現場では著作権や肖像権に関わる情報を、安易に使用したり転載したりと法律的に非常に危険な状況にある。学生はもちろんのこと大学の教員もしっかりとした知的財産権に関する知識を持つ必要がある。[2]

##### (3) 情報活用モラルの問題

コミュニケーション能力の低い学生はLINEを媒介としたイジメを起こす。[3]この点についてLine.meではイジメ防止の対策を発表している。[4]ただ、これらの問題はインターネットやツールの問題だけではなく学生の心の教育の問題であり、高度情報化社会を生きていくための道徳教育の在り方が問われていると言える。

#### 6. まとめ

本発表では少人数クラスにおいて汎用型コミュニケーションツールであるLINEの教育活用事例の紹介を行った。発表者のクラスでは全員がLINEを使える環境にあったために今回の実践研究が行うことができた。しかしながらアンケート調査の結果からはLINEを使わない学生やスマホを持たない学生も少なからず存在することもわかった。

今後LINEのような汎用型SNSを少人数クラスでの情報伝達手段とするためには、どの学生に対しても平等に情報が行き届く必要がある。教員と学生との接点を何処にするかという線引きは難しい。手紙から電話へ、電話から携帯へ、そして携帯からWEBやemailへと時代と共に急速に変化してきた情報伝達手段。

今後もLINEのような使いやすく情報伝達速度の速いコミュニケーションツールが登場することは想像に難くない。高速情報化の流れの中でSNSを教育に有効活用するためには「規制や禁止」ではなく「共に育む」ことが重要であり、そのためには今後も教員と学生が一体となり、多くの知見を積んでいく必要があると考える。

#### 参考文献・参考サイトURL

- [1] 学校教育 - 情報活用能力調査 情報活用能力育成のために (PDF パンフレット), 2015年3月, 文部科学省 <http://jouhouka.mext.go.jp/school/joukatu/>
- [2] 平成18年度特許庁研究事業 大学における知的財産教育研究事業 研究成果報告書, 2007年3月, 山口大学 木村 友久 (研究代表者)
- [3] 「ネット上のいじめ」に関する対応マニュアル・事例集 (学校・教員向け) 【概要】, 2008年11月, 文部科学省 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/20/11/08111701/001.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/11/08111701/001.pdf)
- [4] LINE 安心安全ガイド, 「LINE ワークショップ コミュニケーションを自ら考える」2015年6月 (閲覧), [line.me http://line.me/safety/ja/workshop.html](http://line.me/safety/ja/workshop.html)

以上